総評　2021.1月分　杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。
「楕円をたくさん書いていると／たまに卵の幽霊が紛れ込む」（燦嗣いとり）
書くという行為によって呼びよせられる「幽霊」が瑞々しく予感されている。
「昼下がり／急須で入れた茶の中に／宇宙はあるかと想像してみる」（いけす）
日常のなかにふと現れる「宇宙」への入り口。それをひとりしずかに覗き込むすがたが余韻となって残る。
「ぎんいろの蛇口をひねり水をだす／／鳥がないてる／ひとりはこわい」（白野）
孤独と背中合わせの好奇心に導かれ、おそるおそる前へ進む。その心のさまがリアルだ。
「体調を崩すってのは／蜘蛛の糸／急に切られる感触に似る」（さいう）
体調を崩すことにも「感触」がある、という鮮やかな発見。不調による心身のたわみだけでなく、その後のだるさをも含蓄した「蜘蛛の糸」が見事。
「マスクの子／集まってまた／離れては／花占いにいそしんでいる」（さいう）
「マスクの子」という言葉が新しい意味を作っている。意味で詩をつくるのではなく、詩で意味をつくっているところに、詩のセンスのようなものを感じる。
「ぐわぁらぐわら／笑い方も鳴るお腹もおならも／雷様みたいなじいちゃん」（さいう）
ひとりの人間から放出される賑やかなオノマトペが楽しい。その人の魅力を十分に伝えている。
「雷鳴のように雀はひるがえり」（さいう）
地面でくるくるとひるがえるように飛ぶ雀。その小さな躍動感がリアルに切り取られている。
「ざうざうと犬が雷雨に吠えている」（さいう）
雨風と犬が吠える声を混ぜ合わせ、「雷雨」へと高める、という手さばきに注目。
「とんかんてぃとら／かなづちおちた／とんかんてぃとら　てぃとら」（紫撞鐘）
「かなづち」が奏でる美しい詩的オノマトペ。「てぃとら」は落下の際のバウンドの様子だろうか。とても巧みだ。
「雪の日の路地裏で／猫が夕日に／飛び蹴りをする／僕は貧しさに負けない」
情景と声にならない決意がともにくっきりと立ち上がっている。

お名前は評価後にひとつひとつ検索して出しています。思いがけず、「さいう」さんの作品が並びましたが、たしかに卓抜していると思います。
それでは、来月もお待ちしています。